



町の顔「水車」をモチーフに駅前整備が進んだ

# 「水車の町」アピール

「水車の町」を標榜する旧能登川町。なぜ水車？水車といえば別にここでなくても、昔は稲作地ならどこでも見られたものなのに…。なんて思いつつ、まず水車と能登川の関係を調べようと、今年の元日に合併東近江市になったばかりの能登川支所へ。玄関先の池には水車が回り、緑が美しい庭園を設ける。そはに「水車のこころ」と題した看板も立つ。確かに水車は当地では象徴的存在だ。



JR東海道線「能登川」



産業建設課で聞くと、同町では明治時代を中心にして、三六基が大同川、瓜生川、鉢光寺川の町内三大水系で、主に精米で活躍した。一番古い水車は天保元（一八三〇）年の設置。その後、電気やほかの動力に取って代われ、昭和四十六年を最後に全て姿を消した。米どころにとって水車にこだわるのは、歴史の中のある種の郷愁、オマ

ジュなのだろう。平成十五年春に完工した駅舎（約千三百平方メートル）の外観は、そんな水車の町をデザインした半円形の橋上駅。翌十六年に駅舎の東西広場が整備された。新駅舎に設けられた西口には、高さ五・五メートルの二連水車と水車の羽根の一部を台座にした高さ六・八メートルのからくり時計が立つ。さらに正面の大型量販店の外観も水車をイメージし、「水車の町」をアピールしている。

JR能登川駅の歴史は古く、明治二十二年七月一日の開業。駅前には家々が立て込み、隣接町の経済の集積地をも担い、町は駅を中心に発展してきた。そんな旧駅舎は平屋で東口しかなく、これまで西側の住民は不便をかこっていた。加えて開業百年以上を数え、老朽化も目立っていた。

駅職員の話では、現在の乗降客数は一日平均一万五、六千人。新駅舎になって一日さっと三千人近く増えた勘定という。快速が停まり、大阪も通勤圏内という便利さもある。

新駅舎完成に合わせて西側に、戸建てやマンションなどの建設が進み、支所の女性職員は「連日、新しい居住に伴う住民票が次々出て、そのラッシュぶりを窓口で実感した」と振り返る。今も住宅開発は進んでいるようだ。

かつての「駅前」、東側にはすぐ商店街が広がる。写真下。その数、大小約二百軒。創業が百年以上という老舗店もある。昔からの地域住民との結び付きが濃い。現在は「生活圏なので駅前に出たときは、東も西も利用してますよ」という新住民も多い。西口の開設により、商店街の一部で活性化を目指して「お買い物支援マップ」を作成。店の所在地、電話番号、トイレ、休憩所などを記し、お客サービスに力を入れる動きも出てきた。

能登川支所の水車のこころに「軸（新駅？）を中心、地域でも水車のようにひとり一人が手を結び、円満な絆を結んで」との文がある。表面をなぞっただけだが、ちよっぴり水車の町のこころが分かったような気がした。